

教育と文化

No.114

平成29年7月1日
 公益財団法人
 愛知教育文化振興会
 岡崎市明大寺町字馬場東170番地1
 電話 0564-51-4819

心に残る言葉

公益財団法人愛知教育文化振興会 理事長 佐々木尚也



「君はいつもいい顔をしているねえ。」

着物姿で玄関の外まで私を送り、その言葉をかけてくださった先生は、二週間後にご逝去された。生涯忘れられない言葉である。

心に残っている言葉を振り返ると、思ってもよらぬところを褒めていただいた言葉や、苦しい時に激励してくださった言葉が浮かぶ。これは、単に内容を喜ぶのではなく、その人の私自身に向けた思いをかみしめるからであろう。

「褒められて育つタイプ」という言葉が

流行したが、単純ではない。自分が努力しているところを認めてもらったのではないと、納得できない。思いもよらぬところを褒められた場合は、自分のことをよく知り、尊敬している人でないと、長く心に残らないようである。

心に残る褒め言葉は、自信がもてないときの支えになる。思い悩んでいるのでなく前に進むのだという決断を後押ししてくれる。認めてくださった方に恥じない自分でなくてはならないと思う。

一方で、叱られたり論ざれたりした言葉は、いつもは心の奥底にしまっている。自分に非があるという負い目があり、時折振り返って噛みしめる。これも自分をよく知り、尊敬している方の言葉である。叱られたときに、大いに自分を恥じて、全力で対処したからこそ、ほろ苦さとも懐かしさを感じ振り返るのである。

褒め言葉であれ叱責であれ、心に残る

言葉は、正面から向き合った誠実な関係の中で交わされたものである。高を括らず、ごまかさず、自分にできる精一杯で向き合う人間関係が、言葉の意味を深く重いものにする。

学校教育の場は、言葉によって進められることが多い。指示、説明、発問、意見、感想など、たくさんの言葉があふれている。授業では、学年が上がるにつれて学習内容が複雑になり、一つの言葉をじっくり考える余裕がなくなっている現実がある。また、行事や部活動、生徒指導の場面では、言葉が一方通行になることが多い。

一人一人と向き合える場として、生活記録に朱筆を入れる教師は多いが、その内容はどのくらい心に食い込むものになっているだろう。子どもも教師も時間と鉛筆を使うだけの、形式的な作業に陥ってはいないか。朝や帰りの短学活で、担任はどういう話をしているか。翌日の準備や提出物の確認、学校生活に関する指示に終始してはいないか。人工知能にも話せるような内容ではないか。

子どもと教師をつなぐものは言葉だけではない。だが、言葉を大切にしている教師は、言葉をないがしろにする教師よりもはるかに大きく、深く、広い内容を伝えられる。言葉を大切にしようとするのが、伝えたいことがなかなか伝わらないのが教育の現場である。

受け止める側の目で自分を振り返りな

がら、日々、鍛えた言葉で話しかけたい。その上で、たくさんの子どもの中の一人の心に一言でも残ったならば、これに勝る幸せはない。

尊敬する大好きな先生が褒めてくださったのは、先生と話している嬉しさの表れた顔であった。鏡に映る顔に向かつて、今日出会うすべての人に「いい顔」で向き合おうと呼びかける。

もくじ

巻頭言

心に残る言葉 佐々木尚也

三河教育への提言

「みる」ということ「みえる」ということ
 そして「見極める」ということ 今瀬 良江

三河の文化を訪ねて

民衆の自由の獲得と愛に生きた人
 村松 愛蔵 山田 敦

三河教育会館の竣工

平成二十九年年度研究発表表校一覧

刊行物の編集とわたし

夏休み日誌・デーリーイングリッシュ
 親と子の自然観察ガイド

平成二十八年年度最優秀論文

早川さやか
 教室の窓辺 伊藤 知夏・神取 敬行

平成二十九年年度学校教育ボランティアグループ活動紹介

学校教育ボランティアグループ活動紹介
 行事予定・編集後記

三河教育への提言

「みる」ということ

「みえる」ということ

そして「見極める」ということ

みよし市教育委員会教育長 今瀬 良江



はじめに

「このころ、やっと今瀬先生のおっしゃっていたことがわかるようになりました。以前は、先生の話されていることの意味がわかりませんでした。」

久しぶりに校長として勤務していた小学校に伺い、思い出話に花を咲かせていた折、A先生から言われたことばです。校内の授業研究をリードしていたA先生から、退職して三年も経ってからこのようなことばを聞かされたことに少々驚いた反面、うれしくもありました。少し強引にやりすぎていたのかなという反省とともに……。

長年多くの先生方を見てきて、教師は段階を踏んで、少しずつ少しずつ成長していくものだと感じています。教師が成長するには、日々の学びが重要であり、授業力一つとっても、多くの身に付けなければならぬ要素があります。中でも、私が授業で一番大切にしたいのは、「みる」ということです。

「みる」とは

授業が指導案通りにいかないことはよくあります。むしろほとんどの授業がそうかもしれません。国語科の物語文の授業で、事前に子どもの一人読みを座席表に落として授業の構想を立てて臨んだにもかかわらず、子どもが、事前に書いていた意見と全く違う意見を言ったために、教師が動揺する姿をよく見ます。

「一人読みは動く」と言われた方がいます。子どもたちは、昨日は昨日、今日は今日といった捉えをしているようですし、授業中たくさんのごことに気づき、頭をは

たらかせています。文章を読み直したり、友達の意見を聞いたりして新たな考えをもつのは、素晴らしいことであり、そうであってほしいものです。しかし、想定外の子どもの状況に、瞬時に的確に対応することは容易いことではありません。

「東海国語を学ぶ会」顧問の石井順治先生は「予期していない子どもの状況に対して瞬時に的確に対応することは簡単ではありません。テキストや題材が深くみえていて、その時々の子どもの考えがみえていて、それらの考えと考えのつながりやテキストや題材とのつながりがみえていて、それらがどのようにかわりあつたらどういう学びが生まれてくるかという先がみえているといった『みえる』という教師の知的・感性的判断がなくてはできないことだからです。しかも、それを瞬時に行わなければならないのです。どれだけ難しいことなのでしょうか。」と述べられています。

「みる」「みえる」ということは教師にとって永遠の課題かもしれません。実践としては振り返り、また実践しては振り返ることを繰り返しながら、根気よく、少しずつでもいいから「みる」「みえる」力を鍛えていかなければならないと思うのです。

まずは授業の形から「みる」目を養う

先に述べたA先生は、まさに「みる」ことに心血を注ぎ、「みえる」ようになっていった先生でした。

赴任当時、子どもたちの落ち着きのな

さ、個別の支援を必要とする子どもや保護者への対応で先生方が疲弊しているように感じられました。教室をまわると、教師主導の一言一答式や、子どもの発言や活動よりも教師の話が多い授業も多く見受けられました。

そこで、「学校を変えるにはまずは授業から」と、元刈谷市立衣浦小学校教頭の林知子先生を講師にお招きし、そのお力を借りながら授業改善に取り組みしました。

先生方にはいろいろな個性がありますし、経験や年齢もさまざまです。ある程度学級経営がうまくいっている先生方にとって、指導方法を指摘されることは、これまでの実績を否定されたようで少々苦痛であったかもしれません。子どもは言われたことをきちんとやっているし、こんなに丁寧なワークシートや資料を用意したのに何がいけないのか、そう思われた先生もいたかもしれません。しかし、そういった授業は、しばしば教師が主人公になっており、子どもが主体になっているとはいえないものです。そんな先生方に、まず授業の形を変えることをお願いしました。そのとき、いつもかけたことばは、講師の林知子先生のことばです。もともと、「だまされたと思ってやってみなさい」「とにかくやってみなさい。絶対うまくいくから」でした。

最初に取り組んだのは、アイコンタクト。子ども一人一人と目を合わせ、一人一人とつながってから、教師は話し始めます。これは子どもを「みる」こと

一歩です。子どもの表情をみれば、授業に向かう姿勢、つまり意欲の度合いがみえてきます。

次は、待つこと。市内の学校で取り入れられている前田勝洋先生の「全員がバスに乗る授業」の実践に従い、教師は発問してもすぐに指名せず、多くの子が挙手するまで待ちます。できれば全員。それから授業を始めます。

そして、意見が出て余分なことはいわないようにします。「なるほど」「そうか」「つなげて」ということばを使い、子どもの意見の選別につながる「他に」は言わないようにしてもらいました。教師が聴くことに徹することで、子どもの考えもみえてくるようになります。

さらには、話し合うときに机を「コの字型」の配置にすることも大切です。教師主導の授業から脱却し、子どもが互いの考えを出し合い、聴き合いながら探究していくためには、互いの顔が見え、だれがどんな様子かを知ることができるコの字型が最適です。グループ活動も折に触れ取り入れるようにしました。ただし、構成人数は四人までとし、男女の座席が市松模様になるようにします。机の隊形を変えるだけで、子ども同士のつながりがみえてきます。

授業の形だけを変えてもと言われる方もみえますが、これだけでも、少しずつ授業が変わりだしたことは確かです。待つことを続けるうちに、挙手が増え、多様な意見が出るようになってきました。自分の意見をみんなが聴いてくれたり、

グループでの活動も取り入れたりすることで子どもたちの参加度も高まってきました。

変わっていく授業の中で、ぜひ、子どものわからなさをお祈いしました。

さらに「みえる」ために

子どもたちの参加度が高まると、次は授業の質を高める段階に入ります。そこで、声をかけたのは教材理解についてです。

例えば、国語科では教材文を書き写して、教師自身が一人読みをすることを勧めました。教材としては何度も扱ったものの、文章を書き写して、じっくり読むなどということをしてきた先生はだれ一人いませんでした。教師自身が一人読みを始めると、これまで見落としていたことばや情景描写、登場人物の心情の変化などに気づき、単元構想が変わります。場面ごとの読み取り方式から、物語の主題に迫るような課題をもとにした単元構想になってきました。

圧巻は、授業後半のさらなる深めの課題です。子どもの反応から、どこに注目させていくか、それこそ瞬時の判断です。冒頭に登場したA先生の授業では、大きな渦が巻くように、子どもたちが考えを出し合い、聴き合う場面に何度も出会いました。A先生の確かな教材理解と、日々子どもの考えを座席表に落としながら一人一人の考えをつかむ努力が、素晴らしい授業力を育んだのだと思います。

それは、教材がみえてきたこと、子どもの考えがみえてきたことに他なりません。

同僚性の中で「みる」目を鍛える

すばらしい授業ができるようになったA先生ではありませんが、常にそのような授業ばかりではなかったようです。当時の職員室では、「今日の授業は撃沈してしまいました。」などということばが聞かれることもありました。つまり、子どもの意見の真意がつかめず教師が勝手に引っ張ってしまったり、あるいは話し合いをどう進めたらよいか悩み、思うような授業ができなかったりしたときのことばです。

一人て授業力を高めていくことは、簡単なことではありません。だからこそ、同僚と相談して授業の構想を立てたり、自分の教材解釈を聞いてもらったり、授業を第三者に見てもらったりすることが必要なのです。教師の専門性は経験によってしか深まらないと言われていました。授業実践を一人あたり年二回から三回行い、実践の中で磨き合いました。子どもだけではなく、教師同士も互いに学び合う環境を大切にしました。

A先生の言われた「やっとなかりました。」のことばの奥には、なぜコの字型がよいのか、なぜ教材に精通していなければならないのか、理論と実践が一体化して腑に落ちたからこそのことばであると思います。若い先生方の中には、とにかく見よう見まねで授業をされている方もおられるかと思えます。最初はそれでい

いのです。誠意と情熱をもって実践しているうちに、やっていることの意味や意義がわかり、確かな授業づくりができるようになります。

おわりに

「みる」ことによって「みえる」ようにしていかなくてはならないことは授業だけではありません。教育現場では新学習指導要領への対応はもちろん、いじめ・不登校、地域の教育力の更なる活用等、喫緊の課題は山積しており、教育委員会の責任は重大です。

教育関係のある資料に「ビジョンを示しつつ戦略をもって、学校と教育委員会との関係づくりをすすめる教育長のリーダーシップの発揮が、この度の学習指導要領改訂の理念実現に欠かせない。」などと述べられていれば、なおのことです。今、私の机上には多くの図書や資料が積み上げられています。それらを片端から読みあさっては、理解に努める日々を送っているところです。

眼で聴き耳で視る「眼聴耳視」ということばがあります。「見えないものを見ようとする。聞こえないものを聞こうと努めること」を言うのだそうです。シャワーのように降ってくる教育改革、そして急速に変化する社会の中で、それはどんなことを意味するのか、何のためなのか、今後どうするのかなど、「眼聴耳視」の眼と耳で見極めていかなければと自身を奮い立たせています。